走れ 不屈の車いすランナー

車いすの陸上競技で活躍している田中浩貴さん。昨年開催された全国障害者スポーツ大会をはじめ、県内外の大会には積極的に参加を続けています。小学3年生の時に不慮の事故に遭い右足に麻痺が残り車いす生活に。そして、中学時代に出会った車いす陸上競技。そこから全国大会で活躍するようになるまでのお話を伺いました。

前傾姿勢で機関車のように車いすで疾走する田中さん。播磨横田駅周辺の直線道路が主な練習場所です。横田・岸呂間の直線は約1・5㎞あり、「往復3㎞を6本程度走っています」と水を片手に笑顔で教えてくれました。

競技用車いすの重さは、生活用の3分の2の約10キログラム、足置き場はないため正座して乗り込みます。前方にも車輪が付いており、縦長の形状が特徴。直線での最高時速は20キロ以上出るといいます。また、顔と地面との距離が近く、少し漕いだだけでグンとスピードが出ます。

競技歴は16年、これまで短距離から長距離まで様々な種目に挑戦し、数々の大会に参加、好成績を収めてきました。

緊張感が伝わる 800 mのスタートの瞬間。手前が浩貴さん。（本人提供）

奪われた日常

「体を動かすことが好きで、友達とよく公園で野球をして遊んでいたんです」。幼少期を思い出しながら静かに話してくれました。

小学3年生のゴールデンウィーク中に不慮の事故に遭遇。気づいたら病院のベッドの上でした。1カ月間意識がなかったといい、目が覚めた瞬間「何があったんや」、うまく状況が飲み込めませんでした。後日、親から「もう意識が戻らないかもしれない」と医師から言われていたと聞きました。

意識は戻ったものの、脳を強く打った影響で、右足に麻痺が残り動かしづらくなり、車いす生活になりました。「仕方がない。でも生きてて良かった」。現実を受け止め、落ち込むことは一度もなく、前を向いていました。半年間の入院生活を経て、歩行器を使って小学4年生時に復帰。特別支援学級に移ったが、休み時間にはいろんな学年の子たちが教室に来るので、寂しさはなかったと当時を振り返ります。

偶然の出会い

中学・高校は親の勧めもあり、たつの市にある兵庫県立播磨養護学校へ進学。「周りは自分と同じような境遇の人たちなので楽しかった」と笑います。また、寄宿舎のある学校で帰省は週末だけ。平日は友達の部屋や集会室でボードゲームなどをして遊び、週末もこっちで過ごしたいと思うほどでした。

部活動にも積極的に参加。バレーボールや音楽部に所属していましたが、転機は中学2年生の時に訪れます。教室の窓から外を見ていると車いすで颯爽と走っている部員たちの姿を見て車いす陸上競技部への入部を決意。始めは、生活用車いすで走っていたので重くて腕がパンパンに。でも、気持ち良いし、体を動かすことがとても楽しいと感じました。

練習は、学校付近にある1周1・5㎞のコースを5周走ります。最初は、1周12分くらいかかっていたけれど、慣れると6分ぐらいで走れるようになりました。

トラックレバーを押してコーナリング。この操作技術がむずかしい

ブレない強さ

「中途半端で終わるなよ。続けろよ」。本格的に競技を始めるにあたり父から言われた言葉です。自身も、やると決めたらやる。陸上1本に絞ることにしました。目標ははっきりしており、「いつか全国大会に出場する」。仲間と一緒に競争し合いながら自分の限界に挑戦できるのが楽しいと感じました。

競技用車いすは特殊であり高価でしたが、両親にお願いして買ってもらいました。ブレーキをかけるタイミングが難しく、練習中にカーブを曲がり切れずに田んぼに落ちたことがあります。「それも2回も」と笑います。ちょうど田植えの時期であり、泥だらけになりました。コーナリングは、車いすをカーブさせる役割を果たす「トラックレバー」を操作します。この操作技術が勝負の分かれ目になるといいます。

車いす陸上競技は、筋力だけではなく、漕ぐタイミングや体重移動など、繊細な技術も要求されます。自己流だった練習に顧問からの教えが加わり、成績も順調に伸び、徐々に頭角を現してきました。高校卒業後も仕事をしながら練習に励みました。

異次元のスピード

初出場したハーフマラソンでまさかのアクシデントに見舞われます。コース序盤にあった下り坂。体感したことのないスピードに思わず肩に力が入る。直後のカーブで曲がり切れずに防波堤に激突。痛みで呼吸ができませんでした。それもそのはず。衝撃で肋骨が折れて肺に刺さっていたのです。ドクターヘリで緊急搬送される大事故でしたが「不思議と恐怖心はなかったですね」とサラリと話します。性格もさることながら、まっすぐに突き進むスタンスは、競技への向き合い方にも表れています。「駆け引きが苦手で。最初から飛ばしてしまうんです」。下り坂だと最高時速は40キロ以上出るといいます。

毎年4回ほどハーフマラソンにエントリーしています。そこでの成果が評価され、これまで兵庫県代表として3回全国障害者スポーツ大会に出場してきました。昨年出場した栃木大会では陸上競技1500mで優勝。800mでは準優勝に輝きました。「800mはタイヤ一個分ほどの差で負けたんです。悔しかったですね、次は勝ちたいです」とリベンジを誓いました。

障がいのある仲間へ

「引きこもったら終わり。一人になってしまう。夢や目標を持つことは大事だと思うんです。何事も諦めず楽しむことが一番」。競技への参加や働く理由をこう語ります。障がいを持つと殻に閉じこもりがちですが、「外に出て風を浴びると気持ち良いですよ」と笑う。休日には友達とバスや電車に乗って出掛けたり、競技仲間と一緒に練習をして過ごします。加西には練習する環境がないため、道路や加古川の競技場で練習しています。「加西にも陸上競技場があれば」と願います。

逆境でも常に前向きにチャレンジし続ける田中さん。次なる挑戦は、3月12日に行われる京都での全国車いす駅伝です。兵庫県代表として、5人でハーフを走ります。「目標は全員で1時間を切ること」と意気込む。

人生を変えてくれた車いす陸上競技。応援してくれる方も多くいます。競技の発展と普及を思い描きながら、これからも目標を持ち躍進を続けていきます。

西村書店で働く。ここでは本のビニール梱包作業や陳列、新書の仕分けを行う

キラリびと vol.22

田中浩貴 Hiroki Tanaka

平成3年生まれ。小学3年生の時に交通事故に遭い、右足に麻痺が残り車いす生活を始める。兵庫県立播磨養護学校（現・兵庫県立播磨特別支援学校）に進学し、車いす陸上競技に出会う。中学時代から各県のレースに出場。平成25年、第7回兵庫県障害者のじぎくスポーツ大会200mで優勝、昨年10月に開催された第22回全国障害者スポーツ大会で陸上競技1500mで優勝、800mで準優勝に輝く。働きながら、加西市初の車いすランナーとして活躍中。

すっきゃ かさい 広報
2月

	表紙	01
	キラリびと　田中浩貴	02
特集	祝 二十歳会	04
	市政情報	06
	TOPICS 市民生活支援・物価高等対策	06
	脱炭素先行モデル地域選定	08
	イベントカレンダー	14
	まちかど PHOTO ★ニュース	16
	くらしお役立ち情報	19
	わくわく子育て情報	25
	そうだ！図書館へ行こう	26
	かさい消防ニュース	
	おくやみ／各種相談	27
	とびだせ！かさいっ子	28
	加西から広めよう世界の輪	
	みんなで使おう加西弁	

KASAI データバンク

R4.12.31 現在（前月比）

人口／ 42,256 人（-82）

男／ 20,713 人（-36）　女／ 21,543 人（-46）

世帯数／ 18,313（-27）

12 月の出生数／ 10 人　死亡数／ 68 人

● 2/8、22 は市民課・国保医療課窓口を延長（17:15 ～ 19:00）